



袂 水 長 野 隆

(一) 雨

七月に入って、雨の勢いが少し軟らいだ。膚にしれったい霖状の雨も粒子が大きくなってきた。夕立が風に一度煽られ、乾燥し始めた地面に程良い湿りが行渡ると、土の匂いは芳しく鼻をつく。ことに、この緑の雑木に覆われた小径では、むせかえる程になる。

早朝の雨であった。

玖実子は、御山を七分方登っていた。薙葺きの簡単な小屋の中にしゃがんだまま、雲行を窺った。

小屋の中には袂水と呼ばれる曰く付きの清水が、こぶしばかりの石仏の頭の上からチョロチョロと湧き出ていた。雨に打たれる山のすべての草木が、耳馴れた遠い音をつくりあげ、風のように正体を定めず、梢を震わせた。玖実子は膚寒さを覚えた。枝葉に貯え切れぬ雨水が、あちこちで雫を垂れた。雨を吸って、すっかり重く

なつた筵の破れ間に覗く銀色の空から、見る／＼透明なまろみのある結晶がつくれ落ちてくる。

玖実子は、幾分弱まった雨の中に出た。赤土をジトジトと踏みつけ、細く右にくなり上がった小径の角に立った。

朝の冷んやりと湿った風が、せせらぎの音を伴って吹き上げていた。ここは木立に遮られることもなく、展望台に登った時のように、眼下に谷が見下ろせた。谷川のあたりまで低木や雑草が波打ち、水々しく群れていた。左方に右から迫ってくる御山の斜面は、弱い朝陽を受けて輪郭をけがらせ、それでも、ぎっしりと植え込まれた檜の匂いはここまで近い。

玖実子は、眼を細めて頭を屈め、勢いよくそこから走り出した。

山膚から小径に流れ出した雨水を幾度も跳ね上げた。あ。と。ば。ね。が。腰。に。擦。れ。し。く。付着した。暫らく行くと、険しい山路の両側に、朱で塗り込められた木造りの燈籠が現われはじめ、その並んで導く上方に、二つの大岩に結わえ付けられた観音様の飾り物が見えた。黒い土の登り段は、朽ちた雑木で淵どりされ、一段毎に水を溜めていた。玖実子は、ほとんど気にもせず、一気に駆け切った。

雨は、もう霧のように薄くなっていた。

玖実子は、顎を突き出し荒い息遣いを整えながら、大きな岩の間を歩き抜けた。

真向かいに観音様の祠があり、その前の狭い平地をはさんで、三つの土産物屋がある。内一つを玖実子の伯母が営んでいた。祠の手前で、泊り込みらしい巡礼服の信者が三人、雨を避けながら立話をしていた。一度無言に、雨に打たれた玖実子に視線を向け、再び神秘的な顔付を取り戻し、細々と話しかけた。

玖実子は、店の勝手口へ廻って行った。

「おばさん。」

「あらあ。」

大声をあげて木戸を叩く寸前に、内から戸が開き、伯母の驚いた顔が現われた。

荒い息遣いが止まず、汗と雨で濡れてしまった額を手の平で拭い、こびり付いた髪を撫で避けた。伯母は、首だけを外に出し、怪訝に空模様を見上げた。

「びしょ濡れじゃないね。早いね。」と頬をくずし、微笑んだ。

「たもと水の手前で雨が降ってきて、仲々止まんから、走って来た。」

玖美子は、眩しそうに伯母に微笑いかけ、息は未だ荒い。

「中で拭いといで。」

伯母は、姪の頭をボンと軽く叩き、表の方へ廻って行く。そして店の雨戸を戸袋に納め始めた。

その時、けぶっていた雨がとけてしまって、代りに白い陽射が強くなった。

## (二) 秋水

玖美子は、四ヶ月前に母を亡くした。それで、無口な父と優しさを絶やさない祖母と三人暮らしになった。

母は、死ぬまでの約二年間、寝たきりの悪臭を放つ陰質な病人であった。母は口臭にことさら気を病み、わざわざ遠くから見舞に來た親族にまで、棟越しの応待をした。そして頼りない顔でなかなか微笑をつくり、話の途切れた沈滞した時には、まるで魂を抜かれたように衰れに笑いが消え、落ちつかず小刻みに身を震わせた。体裁と言われるばかりの見舞を受けた後には、たいそう安堵した様子で、息遣いが楽に思われた。

初春の陽射が少し温かそうな昼間に、独りでカーテンを全部膚け、白い光をいっぱいに部屋にとった。気分が良ければ、窓も開け、久々の外気をこそばゆそうに、小鼻や口元に皺をつける。時には、寝返りをもつて直接外に顔を出そうとした。

ほつれた髪が、蟬蛻の羽のように半透明に光を透し、微かに動いた。ここに合  
わせた家族の者も、刺に触る氣を遣い、無言のままに暫らくの間を置き、声をかけ、  
僅かに叱咤の意を伝えて諭すように窓を締めた。母は一瞬歪んだ微笑をつくり、  
物憂げに布団に戻った。もう天井のずつと上方にとり憑かれ、眼の焦点が焦げるよ  
うである。

その母も、玖実子が部屋に入った時は、呼吸を乱した。頬がやや紅潮して、子を見  
る眼差には、熱い訴えが為された。そして、我が子の口元や眼の動き、それに  
指先と、感情を代弁するあらゆる動作を、それとなく窺った。玖実子の口が開けば、  
母はハットして身を構え、うしろを向けば、首が追うようにもたがり、見つめられ  
ると、曖昧な視線を虚空に逸した。暫らくこめかみあたりをびくつかせると盗むよ  
うに我が子の表情を見て、視線が合えば、まるで幼な児の恥らいを頬に紅く現わし  
た。

「今日は気分良さそうね。」

「ああ……」

「お茶入ってる？」

「大丈夫よ。」

「そう。」

玖実子の言葉に、母親の氣遣う愛の表現は、むしろ我が子を動的な方に駆立てた。  
大様な言葉は、それだけの重みをもって玖実子を足踏させた。玖実子は鬼子である  
筈だ。もとより母は、その正体を知り、絹のように透明な芳香を仕種のすべてから  
幾度も表出させようとした。だが玖実子は、とりあつことの方が難しい。

夕暮れになって、美しいものが、掠れて集い合う。

「玖実子……。」

父が齒を噛み、胸の熱さが外に滲んで部屋を濁した。

「なにか言いなさい……。」と言葉が途切れて貧しい。

相容れない白糸が数本、ほぐれる際に接び玉が幾つも出来た。

既に背を向けた玖美子は、ことさら櫛の音を優しくし、廊下を歩く足音にも気を配った。重い裏口の硝子戸を開いた時、舂中に火照っていた血が拡散した。未だ冷気に名残りのある夜風に、そっと舂を包み込んだ。

庭の松の木の梢と梢の間に、呑み込まれる程気の遠くなる暗い青さが行渡っていた。母の泣きすする声が聞こえた。幾度か不実な影が眼の前を往来した。耳を逸さない限り、夫婦の向かい合った沈黙の証がすべて伝ってくる。母は、他に及ぼす効果の色合を無下に避けて、続けざま唾を呑むように声を手繰り続けた。玖美子は、心から、その本来の意味に胸を打たれ、黒く大きな庭石の陰で何度も嗚咽した。

玖美子は、祖母の前でいつも猫のようであった。祖母は、老いた寛容を露わにして、微笑を絶やすことがない。祖母は、世間話の他に自分の美しかった話や祖父の偉かった様子をにこやかに語って聞かせたが、時々、思いついた風に眉に皺を寄せ、語調を曇らせた。そしてたどたどしく玖美子の母について話した。哀れっぽく沈んだ調子は、子守歌のように流れて行った。

玖美子は、いつも子守歌に舂が疼き、姿勢が定まらなかった。祖母の優しい声調が一際悲痛を詩い上げた時に、孫は、すつくと立ち上がった。

「おや〜」

祖母は怪訝に問い直す。

「その通りね、おばあちゃん。」

孫は納得したかに見下ろした。

「そんなことかね。」と祖母は嘆息し、老眼を外す。眼をしばたきながら袂の裏を返し、レンズを丹念に拭き始めた。

その場に起った空虚なしみが、そのまま二階の自分の部屋で、すぐさま鮮やかに

蘇麗る。玖実子は窓を開け、外気にむせた。

今、母は独りであろう。そして、天井を見てばかりいる。その隣りの部屋に父が居て、少しも頭に入らないテレビでも見て、正坐している。この部屋の床下では耳ざわりな歌謡番組が占領している風だ。父は、雑音の中でひたすら内へと沈潜し、母を恋い。

玖実子は、子として最も愛憎の顕著な方法を用い、今まで父の頭の上に寝をべつて来た。必死だった。そして、親は親で、我が子の用いる気遣いには、どうにも堪えられそうにない。だから順当に胸を開いて、放つとけば、玖実子は鬼子でなくなる。

母の躰がいい時が玖実子の一番淋しくなる時である。

大抵、鬼子は、襖を開けて立ったまま母を見つめた。更にいつまでも入らない。気付いた母は、距離を無視しようとする手筈に自ら動揺し、つじつまの合わないことばかり独りで吐き続けた。時折、言葉の締りの無さに自分で呆れた風なその顔は、何とも哀れであった。子は、それでも唯見据えるだけである。僅かな空白の後、ようやく母の態度が日常を取り戻した時、玖美子は襖を締めた。

祖母はまた、世間話の一つに、よく隣の満君のことを言った。玖実子より三つ歳上の評判の良い高校生である。祖母は、愛の表現に就いて道理にかなった説得をした。年少者を遠廻しに導こうとする赤裸々な俗性である。たとえは、満君が御両親の肩を叩き、美しい言葉でその老を痛み、自らの立場に意志を示す。困惑の表情は奥に仕舞い、為すべき人としての道理を高く掲げている。御両親が顔をほころばせて満君に与える言葉は愛。それにしても満君は建気である。祖母は、満君を新緑の大樹だとして話に柳揚をつけた。

玖実子は、聞く程に躰がずれた。そして、思うことがピクピクと震えだした。満君

の香り高い茂りには、いつとなく季節の匂いをたっぷり含んだ風が励ます筈だ。ところが玖実子は、心情のずつと奥に穏当な季節風を取り込んでしまい、哄笑する間にも吐き出す術が無い。それよりは、冷気に襲かしの北の風を無言の母に吹きつけたいと思った。鉢を用も無く酷使して、母の前では休めておきたいと思った。そう思う度に、とめどもなく涙が溢れた。

母が臨終した夜、玖実子は御山の伯母の家に居た。そろそろ母の病状に訝しいものがまっわり付き始めた頃ではあったが。

炬燵に入り、伯母と向かい合っていた。生気の無い話と互いの視線がテレビの画面を介して適当に取繕われた。伯母は、喉のあたりに大切なものを残し、漏れるのを氣遣って落ちつかない様子であった。

七時の時報のすぐ後、表戸の大きな打撃音と若者の甲高い声とが響き渡ってきた。ヒビの入った空気に、今一度崩れる音を遠く感じた。伯母の女らしい鉢に、活きのいい強い筋が垂直に走った。玖実子は、硬張った眼頭に痛みを覚えた。上半身がメラメラと揺れ動いた。

明りのついた燈籠が、夜路を臆気に遠く屈曲して下へと導いていた。暗い小径で足元がおぼつかず、歩を進めるにつれて、瞬く星座のような家々の燈火が虚ろに見えた。何度か鳥膚に背をやられ、冷え／＼と木間をぬり風の音が辛かった。玖実子は、自分を支えるものが縦横に滑るのを感じた。その内に、視界の黒い影が消え、谷川の音がすると、遠い燈火の瞬きが止み、その明りを確かにして、いっせいに夜を駆け上がり、眼に溢れんばかりに飛び込んで来た。今、下界が匂った。

——いつか、伯母が、母の枕元で遠い昔の話をした。伯母が、遠い昔話をして、母が涙ぐんだ。「スミちゃん」と母が言い、後を探る間も無く言葉を伏せてしまった。「スミちゃん」とまた言って、母は泣いた。伯母が悲痛に姉の手をとり、ぼぐすよ

うにさすり続けた。玖実子は、側で正坐して、窓の外では夜が深まった。伯母が手を休めた時、母は弱い寝息をたて始めた。寝息を聞いて、いつの間にか、玖実子もまどろみ、伯母に鉢を委ね寝入ってしまった。

暗い袂水にさしかかった。伯母が氣を入れ換えるように動きをこまめにし、歩速を緩めて玖実子の手を引いた。小屋の中から、転がるように澄んだ水の音が波紋してきた。中に屈み込むと急に風が吹き、朽ちた庭の匂いがした。玖実子は、厳かに膝頭を合わせ合掌した。意識に無く震動する隅の外から、よく聴くと、密生した木々の一本／＼にあずかる寒氣と谷を吹き上げる湿った風が、穏やかに、だが確かに耳へ伝って来た。溜から溢れ零れた水を足下に踏み、薄く拵がった水面には、たった今ともした蠟燭の炎が映った。伯母の合掌した姿が薄明に映えた。美しい横顔が神々しく浮かび上がった。玖実子は、味わうように眼を閉じ、硬張った手を強く合わせた。

視界に満ちた闇の天幕が、裾を微かになびかせていた。玖実子が暗みへ吸い込まれる自分の眼に気付いた時、裾がにわかにくれて行こうとした。玖実子は、一度眼に力を入れた。

感じるものと言えば、自分の吐息と袂水の音ばかりであった。

了